門真四中だより
「つながる」「わかる」「切り拓く」

令和５(2023)年１月10日
第５９号
編集・発行：校長 上甲 尚

新しい年のスタート！心機一転、頑張っていきましょう！

新年明けましておめでとうございます。令和５（２０２３）年、３学期がスタートしました。今日からまたお互いに気持ち新たに頑張っていきましょう。今年もよろしくお願いします。

１７日間の冬休み、アッという間でしたね。皆さんはどんな年末年始を過ごしましたか。充実した日々を過ごしましたか。２学期の終業式で話をしましたが、元日に保護者の方にきちんと「今年もよろしくお願いします」とあいさつをしましたか。何か変わった事や困った事はありませんでしたか。３年生の皆さんは「高校受験」があるので、いつもとは少し違った気分で過ごしたのではないかと思います。いよいよ待ったなしの時期になってきました。

（北野天満宮の本殿）

元日、京都の北野天満宮にお参りに行き、３年生の皆さんの高校合格（進路決定）、四中のさらなる発展と安泰を祈願してきました。「密」を避けるために早朝に行ったので、参拝する人も少なく空いていました（まだ薄暗かったですが）。だから３年生の皆さん、きっと大丈夫です！（ただし、油断せずしっかり勉強してくださいよ！）最後までコツコツと努力していくことが何より大切だし、人として成長することができるのです。頑張れ、３年生！

冬休みで生活リズムが崩れてしまった人は、早く規則正しい生活リズムを取り戻し、きちんと毎日の生活を送っていきましょう。３学期は実質２か月ほどしかないので、アッという間に過ぎてしまいますよ。１月は「行く」、２月は「逃げる」、３月は「去る」というぐらいです。一日一日を大切にし、「より良い自分」をめざしていきましょう。２０２３年、いいスタートを切りましょう！

Well begun is half done. (始めがうまくいけば半分できたも同じ)

１年の始まりに、歴史小説家の司馬遼太郎氏の「二十一世紀を生きる君たちへ」という本から、メッセージを抜粋して紹介します。

二十一世紀を生きる君たちへ　　司馬遼太郎

私は、人という文字を見るとき、しばしば感動する。ななめの画がたがいに支え合って、構成されているのである。そのことでも分かるように、人間は、社会をつくって生きている。社会とは、支え合う仕組みということである。

原始時代の社会は小さかった。家族を中心とした社会だった。それがしだいに大きな社会になり、今は、国家と世界という社会をつくり、たがいに助け合いながら生きているのである。自然物としての人間は、決して孤立して生きられるようにはつくられていない。

このため、助け合う、ということが、人間にとって、大きな道徳になっている。助け合うという気持ちや行動のもとは、いたわりという感情である。他人の痛みを感じることと言ってもいい。やさしさと言いかえてもいい。

「やさしさ」「おもいやり」「いたわり」「他人の痛みを感じること」みな似たような言葉である。これらの言葉は、もともと一つの根から出ている。根といっても、本能ではない。だから、私たちは訓練をしてそれを身につけねばならない。

その訓練とは、簡単なことだ。例えば、友達がころぶ。ああ痛かったろうな、と感じる気持ちを、そのつど自分でつくりあげていきさえすればよい。

この根っこの感情が、自己の中でしっかり根づいていけば、他民族へのいたわりという気持ちもわき出てくる。君たちさえ、そういう自己をつくっていけば、二十一世紀は人類が仲良しで暮らせる時代になるにちがいない。

この四中を「やさしさ」にあふれ、人を「思いやり」、お互いに「いたわる」ことができる学校にしていきましょう。

ウクライナについて学ぶ

年末の１２月２６日（月）、ウクライナに日本の使い捨てカイロを送る取り組みを行った１年生学級代表会と有志の生徒１０名が、近鉄百貨店上本町店で開催された「ウクライナ民族衣装展示会」と四中生のために特別に開催していただいた「ウクライナ現状報告会」に参加してきました。西先生と海保先生が引率してくださいました。

展示会では、ウクライナから来日中のデザイナーの方からウクライナの伝統衣装や民芸品の説明を受けました。現状報告会では、ウクライナ戦争が始まった直後から現地に避難所を建設する支援活動を行っている小野元裕さん（日本ウクライナ文化交流協会会長）のお話を聞かせていただきました。日本で生活している私たちには想像もできないウクライナの人々の生活の様子を聞き、胸が締め付けられる思いでした。最後の質問コーナーで学代から「ウクライナの中学生はどのような状況にありますか？」という質問には、「学校は一度再開したが、再び止まってしまい、インターネットで授業をしている。こんな状況だからこそ、学校で学ぶことが必要で、ウクライナの人々は何とか学校を止めないように努力している」と答えていただきました。

「一度、核兵器のボタンが押されると１０数分で世界中が燃え尽きてしまう。今の世界はそんな状況だということを理解してほしい。今みんなにもできることは、多くのことを学び、知り、そして知ったことを発信して周りの大人たちに伝え、動かしてほしい」という小野さんのメッセージを受け止め、今後の取り組みにつなげていきたいと思います。